

國學院大學學術情報リポジトリ

縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-07-10 キーワード (Ja): 縄文時代早期, 墓制, 埋葬属性, 人骨 キーワード (En): 作成者: 山田, 康弘, Yamada, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000715

縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性

山田 康弘

要旨

本稿は、縄文時代の墓制研究を行う際に注目すべき埋葬属性について概説したのち、早期の出土人骨のあり方について概観したものである。

埋葬属性とは墓から窺い知ることのできる情報であり、被葬者が生きている時に付加された生前付加属性と、死後に付加された死後付加属性の二つに分類することができる。また死後付加属性は、埋葬後にも見ることのできる可視属性と、見ることのできなくなる不可視属性とに分類することができる。この二者には性格上の相違が想定でき、被葬者の社会的な地位や身分などは可視属性に、遺体そのものへの呪術的な対応は不可視属性に反映されたと思われる。

このように埋葬属性を整理した後に、縄文時代早期の埋葬人骨出土例を概観してみると以下のような点が判明した。

生前付加属性については、特定の傾向を読み取ることはできていない。死後付加属性である埋葬姿勢は、基本的に単独・単葬例が多く、仰臥ないしは側臥屈葬例が主体となる。一方で伏臥例も確認されており、これについては呪術的な特殊性がうかがわれる。複数人骨の出土地点がまとまる場合もあり、墓域が形成されている可能性がある。一方で、装身具の着装事例や明確な副葬品はほとんどないと言える。

以上のように個別具体的な事例に関しては埋葬属性を抽出し、検討を行うことができるものの、数的にまとまった資料が存在せず、その意味では早期の墓制、ひいては当時の社会構造に関しては今後の調査に期待がかかる。

【キーワード】 縄文時代早期 墓制 埋葬属性 人骨

1. はじめに

今回、私に課されたテーマは縄文時代早期の人骨出土例について、その埋葬属性を検討することである。墓や遺体などから得ることのできる情報のことを、埋葬属性と呼び、様々な観点から分類することが可能である。以下、はじめに墓制研究において使用する語句および本稿で用いる埋葬属性という概念について説明を行い、その後早期の人骨出土事例について概観していくことで、その責務を果たしたい。

2. 縄文墓制研究における用語と概念の問題

(1) 墓そのものに関わる用語と概念

縄文時代の墓制研究においては、非常に多くの「専門用語」が使用されている。たとえば、墓や埋葬に関わる制度についても、墓制・葬制・葬墓制のように、ざっとみても三つの用語が存在する。あるいは、墓が集中している地点を指し表す言葉にも、墓域・墓地が、これらの中の区画あるいは群別についても、埋葬小群・埋葬区・分節といった言葉が使用されている。さらには、遺体を一度埋葬した後に、再び掘り起こし埋葬し直すような事例についても、複葬・再葬・改葬・二次葬などといった用語が使用されている。

これらの用語は、研究者によってその概念が規定され、使い分けが行われている場合もある一方、あまり注意を払われずに感覚的に使用されている研究も見受けられる。このような点は、今後広域的に多数の研究者による共同研究を行う際に問題となると思われる。そこで本稿において以下の用語について、とりあえずの概念規定を行っておきたい(山田2001・2007・2008)。

墓：死者の遺体が納められる場所およびその施設を指し示す語。施設に付随する様々な装置をも包含する。

墓制：墓を造り、そして営む制度。その方法については、考古学的な一定のパターンをとって捉えることが可能である。

葬法：遺体そのものを処理し、墓に納める方法のことを葬法と呼ぶ。これは必ずしもパターン化している必要はない。また、遺体処理の過程で火にかけられる被熱行為そのものを独立した葬法と認め、これを「火葬」と呼ぶことはせず、あくまでも葬法中の1プロセスと捉えることになる。同様に火葬骨という語も使用せず、被熱人骨や焼人骨と呼ぶことになる。

埋葬：葬法のうち特に地下に遺体ないしは人骨を安置することを埋葬と呼ぶ。縄文時代の事例の多くはこれである。

墓地と墓域：墓が群在化しており、これが集落内において居住域と重複があったとしても空間的に区分されている場合、これを墓域と呼ぶ。また、墓群が居住域とは隔離し単独で存在するような場合、これを墓地と呼ぶ。

土壙：墓穴のこと。土坑墓という語は、性格を限定しない穴の意である土坑＋墓から成り立っており、土壙墓とすると意味が重複するのでこれは使用しない。

これらの概念は主に墓そのものに対するものであり、これ以外にも遺体そのものの取り扱い方という埋葬形態についての概念規定が必要である。

(2) 埋葬形態の分類

埋葬形態については、一つの埋葬施設内における遺体数と遺体処理の回数という二つの観点からの分類が適当であろう。

同一の埋葬施設内における遺体数に関しては以下のように分類が可能である。

単独葬：埋葬施設内に安置された遺体数が1体のもの。

合葬：埋葬施設内に安置された遺体数が2体以上のもの。

多数合葬：合葬例のうち、特に遺体数が3体以上のものを多数合葬例と呼び、通常は5体合葬などのように遺体数を付して表示する。

遺体処理の回数については以下のように分類できる。

単葬：埋葬行為が一回で終了しているもの。

複葬：埋葬行為が終了するまでに複数回行われたもの。従来、改葬や再葬と呼ばれた事例が含まれる。

遺体処理の回数と遺体数を組み合わせて、単独・単葬例などと表示する。

単葬か複葬かを判断する際のポイントとしては、以下のようなものが考えられるだろう。

- ・土壌の規模が単葬例と比較して大幅に小さくないかどうか。
- ・土壌に切り合い等、何らかの掘り返された痕跡はないか。
- ・埋葬姿勢を含め、人骨各部位の配置が解剖学的に自然な位置関係にあるか。特に、頭蓋・下顎・四肢骨・椎骨等が自然な位置関係にあるか。
- ・末節骨、基節骨、楔状骨、手根骨などの細かい骨が存在するか。また、それらが関節連衡しているか。

これらの点を検討し、人骨各部位が解剖学的に自然な位置関係にないと判断された場合、複葬と判断されることになる。

この他、人骨の各部位が動いているとすれば、どの骨がどのように動いているかということも重要である。たとえば、四肢骨などの一部が動いている場合、遺体が埋葬後にどのような環境下におかれたのか判断することができる場合がある。遺体の周囲に土が入っており、遺体そのものが土で覆われていた様な場合、これを充填環境という。また棺などが存在し、遺体の周囲に

(42) 縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性

空間があった場合、これを空隙環境という。この両者を判断する際に注目される点は、腸骨と仙骨の位置関係である。腸骨と仙骨は軟骨組織によって接合しているが、遺体が充填環境にある場合、遺体が腐敗した後でも腸骨と仙骨は接合したまま検出されることが多い。一方、空隙環境にある場合は、腸骨と仙骨は、解剖学的位置関係を保ちながらも開離していることが多い。この点から遺体埋葬時の周辺環境をうかがい知ることができる。

(3) 埋葬姿勢の分類

単独・単葬例のうち、従来屈葬と呼称されてきた埋葬姿勢については、腕を伸ばしたものや、脊椎と大腿骨の角度が鈍角のものであっても、膝関節の角度（大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度）が鋭角であれば、屈葬と呼ばれてきた歴史がある。しかしながら、体前面の方向や肘関節の角度（上腕骨と橈骨・尺骨のなす角度）や腰角度（脊椎と左右大腿骨のなす角度）に基づいて分類を行うのであれば、埋葬姿勢については詳細な分類が可能である。

体前面の方向については、腸骨および仙骨の向きを基本として、以下のよう

I：仰臥。腸骨および仙骨の正面が上を向いており、体前面の方向が上と考えられるもの。

II：右下側臥。腸骨および仙骨の正面が右側を向いており、体前面の方向が右と考えられるもの。

III：左下側臥。腸骨および仙骨の正面が左側を向いており、体前面の方向が左と考えられるもの。

IV：俯臥。腸骨および仙骨の正面が下を向いており、体前面の方向が下と考えられるもの。

次に各関節等の角度によって以下のように分類を行う。

右肘角度：右尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度については以下のように分類する。

＋：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度が 90° を超えるもの。

±：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度がほぼ 90° であるもの。

－：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度が 90° 未満のもの。

？：角度が不明なもの。

左肘角度：左尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度については以下のように分類す

る。

- +：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ±：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度がほぼ 90° であるもの。
- ：尺骨・橈骨と上腕骨のなす角度が 90° 未満のもの。
- ?：角度が不明なもの。

腰角度：椎と左右大腿骨のおおよその角度を以下のように分類する。左右大腿骨の配置が大きく異なる場合には、体前面の方向などを考慮しながら、原則として角度の小さいほうを採用することとする。

- +：脊椎と大腿骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ±：脊椎と大腿骨のなす角度がほぼ 90° であるもの。
- ：脊椎と大腿骨のなす角度が 90° 未満のもの。
- ?：角度が不明なもの。

右膝角度：右大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度については以下のように分類する。

- +：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ±：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度がほぼ 90° であるもの。
- ：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ?：角度が不明なもの。

左膝角度：左大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度については以下のように分類する。

- +：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ±：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度がほぼ 90° であるもの。
- ：大腿骨と脛骨・腓骨のなす角度が 90° を超えるもの。
- ?：角度が不明なもの。

これらのデータをもとに、埋葬姿勢を以下のように分類する。方法としては以下の点を原則とする。各関節の角度についても分類を行なうが、実際に各関節に4通りの分類を適用した場合、埋葬姿勢の分類は体前面の方向4通り×右肘角度4通り×左肘角度4通り×腰角度4通り×右膝角度4通り×左膝角度4通りで、実際には4096通りと埋葬姿勢が記述できることになる。しかしながら、この分類項目はあくまでも資料を全体的に俯瞰するときに用いるために設定することから、煩雑さを避けるために肘関節と膝関節の左右は問わないこととし、以下のように分類しておくことにしたい。

肘角度の分類

A : (右肘、左肘) が (-、-) の場合。

B : (右肘、左肘) が (±、±) の場合。

C : (右肘、左肘) が (+、+) の場合。

D : (右肘、左肘) が (-、±) あるいは (±、-) の場合。

E : (右肘、左肘) が (-、+) あるいは (+、-) の場合。

F : (右肘、左肘) が (+、±) あるいは (±、+) の場合。

腰角度 (脊椎と大腿骨の角度) の分類

a : (腰) が (-) の場合。

b : (腰) が (±) の場合。

c : (腰) が (+) の場合。

膝関節の分類

1 : (右膝、左膝) が (-、-) の場合。

2 : (右膝、左膝) が (±、±) の場合。

3 : (右膝、左膝) が (+、+) の場合。

4 : (右膝、左膝) が (-、±) あるいは (±、-) の場合。

5 : (右膝、左膝) が (-、+) あるいは (+、-) の場合。

6 : (右膝、左膝) が (+、±) あるいは (±、+) の場合。

体前面の方向および各関節等の角度を組み合わせたものを埋葬姿勢と呼び、これを上記の分類に基づいて I Aa1、II Cb5のように表示する。この分類方法によっても、その組み合わせは432通りあることになるが、筆者の集成によれば、埋葬姿勢は I Aa1、I Bb1、I Cc3など、いくつかに集中し、そのあり方には地域差が存在することも判明している (山田2001)。このため、屈葬や伸展葬など従来から用いられている埋葬姿勢に関する用語は、表記の利便性を考えて適宜使用することにするが、実質的な分類概念としては、いったん棄却することにした。

3. 埋葬属性の種類とその性格

埋葬属性は様々に分類可能であるが、その属性が、被葬者が生きていたときに付加されたのか、それとも死後に付加されたのかといった付加された時期や、埋葬者 (埋葬を行った人々) やそれ以外の人々にとって可視的なもの

か不可視的なものであるのかといった視点からの分類が、墓制の分析には有効である（山田2014）。

付加された時期による埋葬属性の分類には、以下のようなものがある。生前付加属性：被葬者が生きている間に付加された属性。通常、被葬者自身とそれ以外の他者の両方が認知している属性であり、視覚的なものが多い。大きく以下の二つに分類できる。

- ・生前付加属性Ⅰ類：身体に直接行ない、不可逆的なもの。抜歯・頭蓋変形・文身・傷身などの身体変工が中心となる。また、DNA分析や各種同位体分析、古病理的所見など、個別的な人類学的な情報もここに分類される。
- ・生前付加属性Ⅱ類：脱着可能なものや可逆的なもの。装身具・化粧・ボディペインティングなどが挙げられる。

死後付加属性：被葬者が死亡してから後に付加された属性で、以下の三つに分類できる。

- ・死後付加属性Ⅰ類：墓の構造そのものに付加されるもの。墓の位置、土壌の形態・規模・長軸方向、墓の上部構造、棺など。
- ・死後付加属性Ⅱ類：遺体そのものに付加されるもの。埋葬姿勢、頭位方向、顔の向き、遺体破損など。
- ・死後付加属性Ⅲ類：葬送儀礼の中で付加されるもの。副葬品、土器被覆、抱石、装身具の一部、赤色顔料や剥片等の散布など。

また、埋葬者やそれ以外の人々の視点からみた埋葬属性の分類としては、以下のようなものが考えられるだろう。

可視属性：埋葬後に、生きている人々が目にするのできるもの。埋葬位置、上部構造、上部構造がある場合の頭位方向および土壌規模等。遺体に対して直接付加する属性ではないものが多い。

不可視属性：埋葬後、生きている人々が目にするのできないもの。埋葬姿勢、装身具の着装、土壌内への副葬品、ベンガラ・貝小玉・石器の剥片・白砂等の散布、遺体を包むもの（棺や袋等）、遺体破損など。遺体に対して直接付加されるものが多い。

可視属性と不可視属性は、遺体の性別、年齢、死因、出自、血縁関係、地位・身分、能力によってその表現形が異なる場合があると考えられる。

可視属性は埋葬後もそれを見ることによって、死者への記憶が反復できる。したがって一般的傾向として、可視属性には出自や地位・身分など、故

人が有していた社会的な要素がより強く表現される可能性が高いと想像できる。

これとは逆に、個別の死因や他界観への呪術的対応などは、遺体そのものに対して行われ、不可視属性として表わされた可能性が高い。たとえば、福岡県山鹿貝塚出土人骨に見られたような、骨化後の肋骨や脊椎の除去といった遺体破損などは、その最たるものであろう（永井他編1972）。

これらの埋葬属性の特性を見極めた上で、組み合わせることで、当時の葬法・墓制については社会に接近することが可能となる。これが墓制研究の基本的方法論である。

先に述べた各埋葬属性のもつ性格を利用した上で社会構造の復元を行うには、まず視覚的でありかつ不可逆的属性である生前付加属性Ⅰ類を検討し、これがその他の属性の何と対応するのか見極めた上で結論付けるという方法が有効であると思われる。

一方死後付加属性は、埋葬者によって付加されたものである。これらは被葬者の生前の立場、出自、地位、能力などによって規定される場合もあるが、死因や他界観などに対する呪術的対応であった場合もありうる。

これらの埋葬属性を組み合わせることによって、いくつかの墓制研究の方法論的モデルが設定できる。また、上記の属性から考えることができる仮説に従えば、それぞれの方法論での限界点を明確にできるだろう。たとえば、もし生前付加属性Ⅰ・Ⅱ類と死後付加属性Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類（可視属性+不可視属性）を一度に分析できるのであれば、各遺体にみることのできる個別事象から、出自や階層などといった社会構造や他界観などの精神文化の分析までを射程に入れることが可能であろう。

一方で、死後不可属性のうち墓の位置や形状だけといった一種類のみでしか分析ができない場合、様々な解釈は可能であろうが、その妥当性は決して高いものとは想定できない。その資料単体で社会構造にまで踏み込むには、埋葬施設の格差や極端な副葬品の偏りが無い限り、考古学的方法論だけでは困難である。他の事例との比較・類推という方法をあわせて用いることで、結論の蓋然性を引き上げることが望ましい。

4. 縄文時代早期人骨の出土例

人骨がある程度残存しており、埋葬属性がある程度わかる早期の事例は15遺跡（東鉏路貝塚・大谷寺洞穴・平坂貝塚・石山貝塚・二日市洞穴・岩下洞穴・栃原岩陰遺跡・上黒岩岩陰遺跡・城ノ台南貝塚・帝釈観音堂洞穴・妙音寺洞穴・湯倉洞穴・枅洞穴・向ノ台貝塚・飛ノ台貝塚）より、81例が確認できた。ただし、これは縄文時代の出土人骨全体からみれば、数%に過ぎず、統計的に有効な数字には達しておらず。これをもって縄文時代の墓制全体を語ることはできない。

これらの事例のうち、洞穴・岩陰遺跡の事例については本誌にて別稿が予定されていると聞いているので、以下に開地遺跡における確実な事例、すなわち埋葬属性を検討することが可能な事例を対象に埋葬属性を検討してみたい。

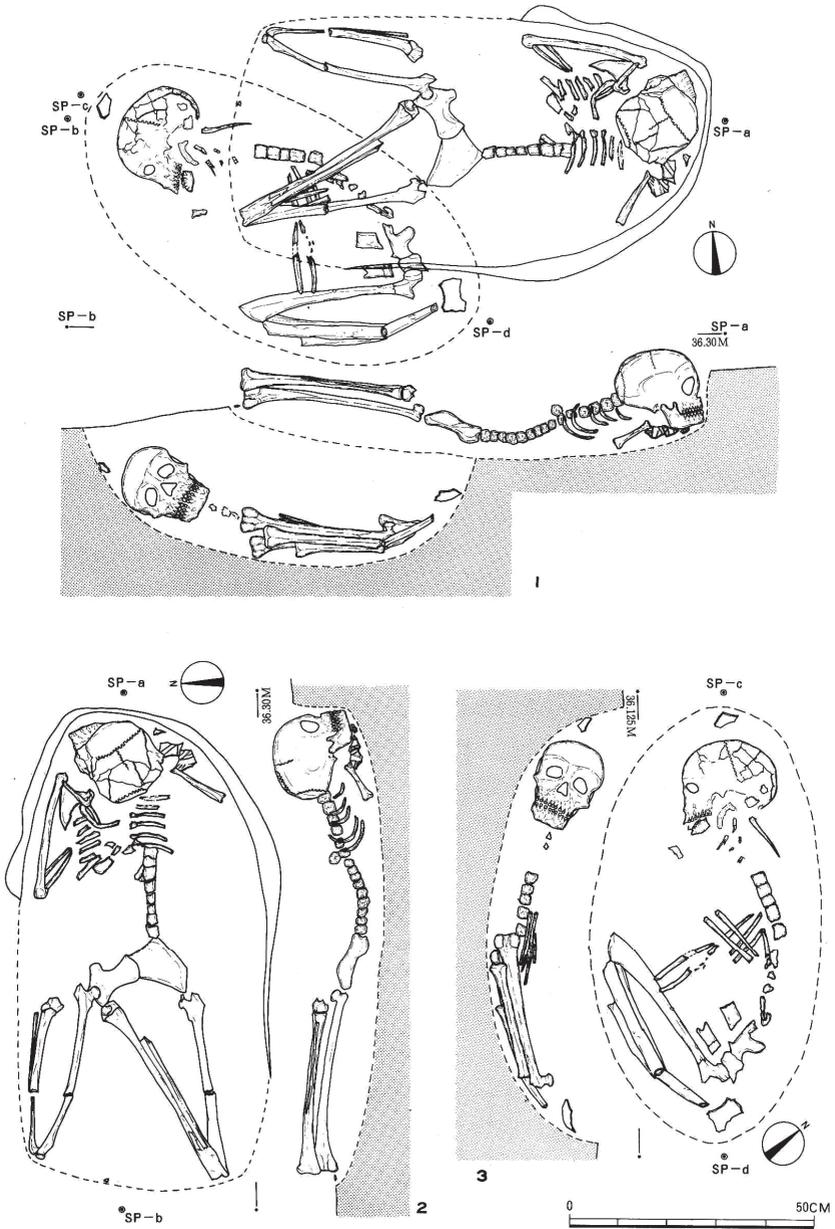
千葉県城ノ台南貝塚出土例（岡本編1994、第1図）

1989年から翌年にかけて千葉大学文学部考古学研究室が行った発掘調査において、縄文人骨が3体出土している。そのうちの1号人骨は貝層中から頭部のみが出土したものであり、掘り込み等も確認できず、散乱人骨であった可能性が高い。確実に埋葬されていたのは2号・3号人骨の2体である（第1図）。周辺より出土した土器より、2体の時期は田戸下層式期と推定される。

1号人骨は壮年期段階の女性とされるものであり、単独・単葬例である。埋葬姿勢はIVAc1で、いわゆる伏臥・屈葬例である。伏臥・屈葬例は、縄文時代全体でも珍しく事例も少ない（2904例中26例、0.89%）が、早期にやや目立つ傾向がある（山田2001・2002）。また、2号人骨には明瞭な耳状面前溝（妊娠痕）があり、経産婦と考えられる。下顎の切歯と第一小白歯には異常咬耗が見られる。これらは生前付加属性I類として捉えることができるだろう。石鏃が1点両膝の間から出土しており、これが副葬品であった可能性があるが確定できない。土壙のプランはおそらく不整楕円形であり、復元長軸長が98cmほど、短軸長が50cmほどと推定される。

3号人骨は2号人骨の下部、わずか数十cm下のところから出土した。壮年期段階の男性であり、単独・単葬例である。埋葬姿勢はⅢDa1、右下側臥

(48) 縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性



第1図 城ノ台南貝塚における人骨出土状況（下段左：2号人骨、下段右：3号人骨）

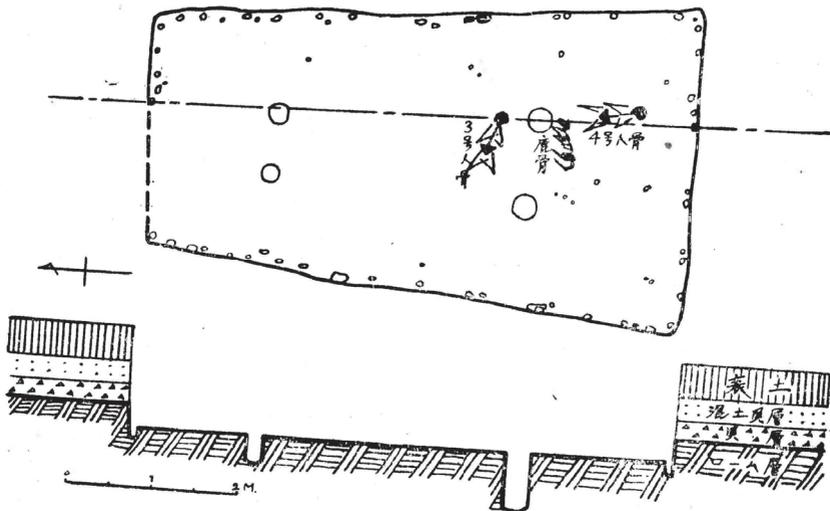
屈葬例である。土壌のプランは確認できなかったが、明確に屈葬の埋葬姿勢を採っていることから、土壌そのものは存在したものと推定されている。

2・3号ともに、2～3歳頃に形成されたエナメル質減形成が確認でき、この時期に離乳があったことが想定される。生前付加属性I類として把握できるだろう。

考古学的に興味深いのは、2号人骨と3号人骨が地点的にほぼ重なった状況で出土したことである。これは、切り合いの関係から時期的に先行する3号人骨の埋葬施設に上部構造が存在し、これを目印として2号人骨を意図的に切り合わせて埋葬したためと推定できる。このような事例の場合、両者間の年代差を理化学的方法によって再度確認する必要があるが、2号人骨と3号人骨における近親性あるいは系譜的連続性を考えることができる（山田2013）。

千葉県向ノ台貝塚出土例（武田1953、第2図）

1946年の発掘調査において、4体の縄文人骨が出土している。遺跡より主体的に出土した土器からみて、これらの人骨の帰属時期はおそらく茅山式期の事例だと思われる。これらのうちI号およびII号人骨は成人女性とされて



第2図 向ノ台貝塚における人骨出土状況（3号・4号人骨）

おり、Ⅲ号とⅣ号人骨は性別不明である。

Ⅰ号人骨とⅡ号人骨はA地点から出土しており、周囲からは焼土や灰などが見つかっており、人為的な配石もあったようだが、埋葬に伴うものかどうかについては判然としない。『千葉市誌』における記述では、土壌らしきものの記述は無いが、『千葉市誌』の22頁におけるⅠ号人骨の調査風景の写真をみると、土壌のような掘り込みが写っており、埋葬施設は土坑墓であった可能性が高い。もちろん上部構造などの可視属性も不明である。Ⅰ号人骨は右下側臥屈葬例であり、Ⅱ号人骨は仰臥屈葬例である。Ⅰ号・Ⅱ号人骨ともに単独・単葬例であったと考えられる。

Ⅲ号人骨とⅣ号人骨は、不整台形のプランを持つ竪穴住居の床面直上ないしはやや上から出土している。両者とも単独・単葬例であり、伏臥屈葬という特殊な埋葬姿勢をとっている。周囲からは焼土や灰、礫などが見つかっており、埋葬時のものと考えられている。土壌などは検出されていない。これら2体の人骨は柱穴跡を挟んで埋葬されていたが、興味深いのは2人骨の間にシカが一頭置かれていたことである。他の事例をあたってもこのような特殊例は確認できず、おそらくは呪術的な対応があったものと考えられる。出土状況としては単独・単葬例であるが、埋葬姿勢が共通すること、位置関係は近接することなどからみて、これらは、ほぼ当時に埋葬されたものと推定される。

神奈川県平坂貝塚出土例（岡本1953、第3図）

昭和24年に明治大学により発掘調査が行われ、貝層中よりほぼ完全な形の人骨が出土している。埋葬施設については確認されておらず、上部構造などの可視属性も不明である。埋葬形態は、単独・単葬例で、埋葬姿勢は、ⅣCc3といういわゆる伏臥・伸展葬であり、非常に稀少な事例である。なお、伏臥・伸展葬は、筆者のデータベースにある2904例中22例、わずか0.75%を占めるに過ぎず、本例が特殊な事例である可能性は高い（山田2001・2002）。

実測図における人骨の出土状況からみて、右肩部付近の骨（上腕骨・尺骨・橈骨など）が動いており、一部に攪乱があったと推定される。また、歯に特殊な磨耗が確認でき、これは革をなめすなど歯を道具として使用した痕跡であるかもしれない。頭蓋後頭部には、インカ骨が確認できた。これらは生前付加属性Ⅰ類と捉えることができる。一方、同じく生前付加属性Ⅰ類と

して、脛骨にハリス線が見られるとされているが、四肢骨そのものはがっしりしており、決して早期人骨においてよく言われるような「きゃしゃ」な人骨ではない。装身具や副葬品など、死後付加属性と推定されるものは確認されていない。

千葉県飛ノ台貝塚

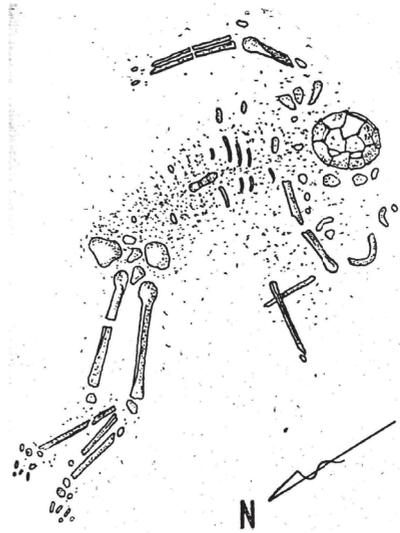
(千葉県史料研究財団編2000、第4図)

1993年に船橋市教育委員会によって行われた発掘調査で、底径1.2×0.7m、深さ0.2mの不整形の土壌内より、2体の人骨が向き合って抱き合う形で出土している。合葬・単葬例であるが、

四肢骨等の遺存状況が不良で、それぞれが側臥屈葬例であることは窺い知ることができるが、正確な埋葬姿勢は不明である。人骨はそれぞれ壮年期段階・男性と思春期段階・女性であり、男女の合葬例となる。

千葉県史の記述によれば、炉穴群を覆うハマグリの貝層の下からこの合葬人骨が出土したとされており、土壌の上部に貝層があり、人骨もそれに接する部分のみが遺存していたようである。写真を見る限り、脊椎や肋骨など緻密質の薄い部位は遺存していないようだ。このような事例は、葬送儀礼の過程で墓や遺体の上に貝を多量散布する事例である可能性があり、少々特殊な合葬例であることとも相まって、注意が必要であろう。ただし、検出位置は遺跡全体から見て特殊な場所であったとは考えにくい。

人骨の帰属時期は周辺から



第3図 平坂貝塚人骨出土状況



第4図 飛ノ台貝塚人骨出土状況

(52) 縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性

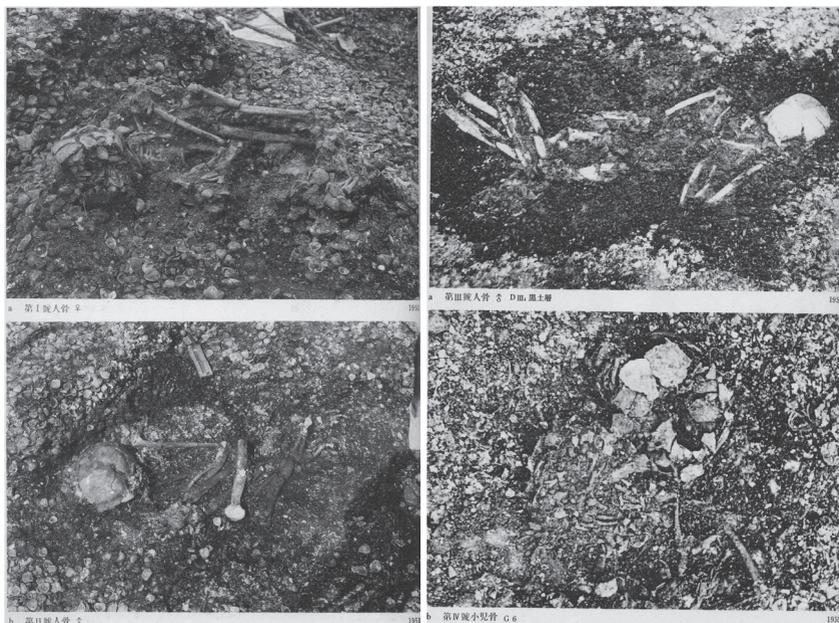
出土した土器によって、条痕文土器、おそらく茅山式期のものと推定されており、開地遺跡においては最古の合葬・単葬例となる。生前付加属性あるいは死後付加属性となる装身具や副葬品は確認されていない。

滋賀県石山貝塚出土例（平安園考古学クラブ編1956、第5図）

1950年から54年にかけて、平安学園考古学クラブによって行われた発掘調査で、5体の埋葬人骨が出土している。

I号人骨は成人・女性とされるもので、単独・単葬例である。埋葬姿勢は左下側臥屈葬で、II Aa1となる。土壙などは確認されておらず、上部構造などの可視属性も不明である。また、装身具や副葬品といった死後付加属性も確認できていない。帰属時期は入海II式期とされる。

II号人骨は成人・男性とされる単独・単葬例である。埋葬姿勢は左下側臥屈葬で、II Aa1となる。土壙などは確認されておらず、上部構造などの可視属性も不明である。装身具や副葬品といった死後付加属性も確認できていな



第5図 石山貝塚における人骨出土状況
(左上：1号、左下：2号、右上3号、右下：5号)

い。帰属時期は入海Ⅱ式期とされる。

Ⅲ号人骨は成人・男性とされる単独・単葬例である。埋葬姿勢は仰臥屈葬であり、I Eb1となる。土壙などは確認されておらず、上部構造などの可視属性も不明である。生前付加属性Ⅰ類として、右第二小臼歯を中心に異常咬耗が確認されているが、装身具や副葬品といった死後付加属性は確認できていない。帰属時期は粕畑式期とされる。

Ⅳ号人骨は詳細不明である。

Ⅴ号人骨は幼児期段階かと思われる子供の単独・単葬例である。写真を見る限り、周囲に円形の土壙が確認できそうであるが、詳細は不明である。埋葬姿勢も判然としないが、おそらく左下側臥屈葬であろう。装身具として、ヤカドツノガイ製の貝小玉19点による首飾りを装着していた。死後付加属性の可能性はあるが、子供の装身具に玉類の首飾りは多いので（山田1997）、生前付加属性Ⅱ類である可能性もある。帰属時期は早期ではあろうが、詳細不明である。

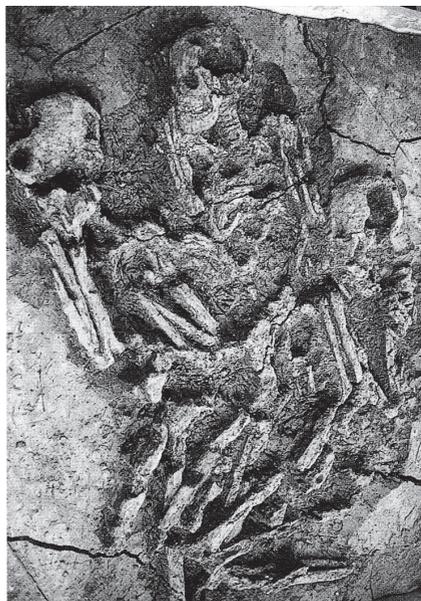
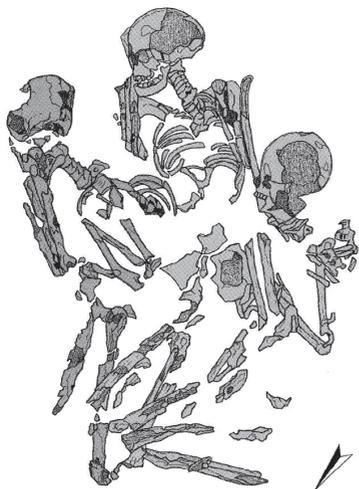
これらの人骨群のうちⅠ～Ⅳ号は、その出土地点が各々2m程度しか離れておらず、その意味では群在化の傾向なしとは言えないが、想定される帰属時期には土器型式レベルで時期差があり、年代測定が必要だろう。

佐賀県東名遺跡出土例（佐賀市教育委員会編2017、第6図）

1993年から佐賀市教育委員会によって行われた第一次調査において、8体の埋葬人骨が出土した。時期的にはおよそ8000年前の縄文早期後葉の事例と考えられている。これらの人骨の出土地点はある程度まとまっており、墓域が存在した可能性がある。

これらの埋葬人骨は基本的に単独・単葬例で、仰臥ないしは側臥屈葬の事例が多い。しかしながら、低地遺跡からの出土であり、上部構造・下部構造を含め埋葬施設は確認できていない。性別としては成人男性が5体、成人女性が2体で、1体は遺存状況が不良で鑑定できなかった。これらのうち埋葬姿勢などの属性が確認できたのは5体である。SP1033人骨は成人男性で、右下側臥屈葬の単独・単葬例であり、おそらくはⅡAbaとなる。装身具や副葬品は確認されていない。SP1047人骨は成人女性の単独・単葬例であり、仰臥屈葬ⅠAa1であった。SP1052人骨は3体合葬・単葬例で、すべて成人男性であった。左側の人骨は右下側臥屈葬例であり、ⅡAa1であろう。中央の

3 SP1052 埋葬人骨



■ 3体同時に埋葬されたもの。いずれも成人男性。
中央の1体が仰臥屈葬^{どうぶくつさう}、他2体は側臥屈葬^{そくぶくつさう}。

第6図 東名遺跡における人骨出土状況

人骨は仰臥屈葬例であり、I Aclである。右側の人骨は右下側臥屈葬例で、II Aclである。いずれの人骨にも装身具の装着はなく、また確実な副葬品も存在しない。これらの人骨については骨に含まれる炭素・窒素同位体比による食性分析が行われている。それによれば、これらの人骨群の同位対比は比較的まとまっており、各自ドングリ類などのC3植物や陸獣、海産物をバランス良く摂取していたようである。

5. 開地遺跡における早期人骨の埋葬属性

以上、開地遺跡における早期の人骨出土例について、その埋葬属性のあり方について概観してきた。これらの検討結果を基に早期人骨の埋葬属性についてまとめておきたい。

生前付加属性については、古病理的所見などI類として捉えることのできるものも確認されているが、それが他の埋葬属性とリンクする傾向を読み取ることはできていない。その意味で、生前の社会的状況等を推し量ることが

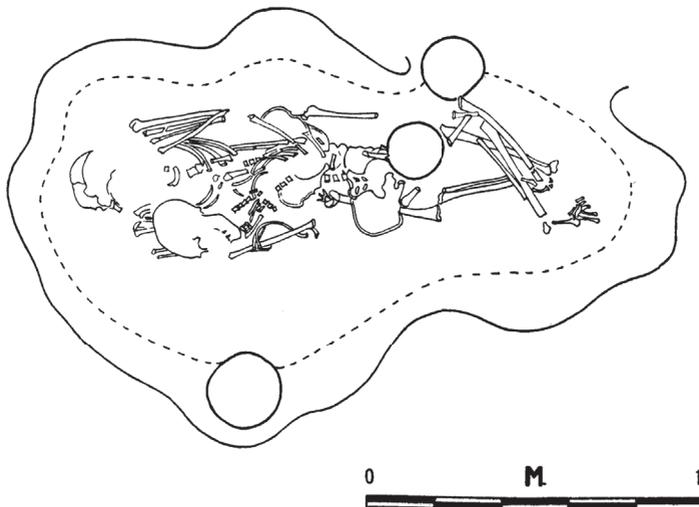
できるような状況証拠は存在しないことになる。

死後付加属性については、埋葬姿勢などが判明しているものの、特殊な取り扱いなどについては不明である。基本的に単独・単葬例が多く、仰臥ないしは側臥屈葬例が主体となる。これはその他の時期も含めて、縄文時代における一般的な傾向と一致しているが（山田2001）、一方で伏臥例も確認されており、これについては向ノ台貝塚の事例のように呪術的な特殊性がうかがわれるものも存在する。また、遺体を一部切断するといった遺体損壊事例や、複葬例は確認できておらず、大分県二日市洞穴遺跡の事例のように同一土壌内に複数遺体が埋葬される合葬・複葬例も確認されていない（橘編1980）。したがって、このような埋葬形態については、洞穴・岩陰遺跡特有の傾向性であると判断できよう。

埋葬地点に関しては、城ノ台南貝塚例や石山貝塚例のように、複数人骨の出土地点がまとまる場合もあり、墓域が形成されている可能性がある。また、土壌の配置状況などから埋葬小群⁽¹⁾を構成し、近親者が近接して埋葬されていた可能性もある。墓と推定される土壌が近接して存在する状況は、人骨の遺存状況が不良であったため本稿では検討を行わなかったが、北海道釧路市の東釧路貝塚など他の遺跡でも確認されており（石川編1995）、早期段階において墓域がすでに形成されており、その中には埋葬小群が存在したことは間違いないだろう。

埋葬形態としての合葬例については、飛ノ台貝塚において2体合葬・単葬例が確認されている。本例において、両者に社会的なつながりがあると考えるのは自然であろう。性別・年齢差から考えた場合、親子や兄弟よりも夫婦として考えた方が良いのかもしれない。このように男女の合葬例で、夫婦関係を推定させる事例としては、晩期の静岡県蜷塚貝塚から出土した4号・5号人骨合葬例がある（向坂1962）。これは、4号壮年期段階男性人骨と壮年期段階女性人骨が同一土壌から出土したものである（第7図）。男性は右下側臥伸展葬（女性は右下側臥屈葬で、男性の腕、肘あたりに女性の頭が乗り、女性の下肢は膝で折り曲げられて、男性側に倒れているという、一見あたかも男性が女性を腕枕して、抱え込んでいるかの様な観がある。もし、早期の段階で夫婦合葬が墓制として存在するのであれば大変興味深い）、現在のところこの仮説を立証できるだけの状況にはない。

また飛ノ台貝塚例において、土壌や遺体上部に貝層が広がっていたという



第7図 蜆塚貝塚における4号・5号人骨合葬例出土状況

点も、当時の墓制を考える上で重要であろう。このような事例は縄文時代の墓にしばしば見ることのできる事例である。たとえば、前期の千葉県幸田貝塚38号住居跡の床面からは伸展葬の人骨が出土しているが、この人骨の頭部から胸部は強く被熱しており、遺体の上半身において火が焚かれたものと推定されている（幸田貝塚発掘調査団1975）。また、当該人骨は貝によって被覆されており、さらにその上には片口付き深鉢が正位で立てられていた。この事例などは、まさに葬送儀礼が執行されるにあたって、遺体に加熱を行い、貝殻で覆った事例として把握できよう。飛ノ台貝塚における合葬例も、幸田貝塚例のように特殊な葬法を採られた可能性は排除できない。

一方で、早期の埋葬人骨出土例においては装身具の着装事例や明確な副葬品はほとんどなく、死後付加属性Ⅲ類などの検討は不可能である。石山貝塚V号人骨の事例は、子供の埋葬例にともなうものであり、おそらくは魔除け・お守りとして身に付けられていたものであろう（山田2019）。

以上のように個別具体的な事例に関しては埋葬属性を抽出し、検討を行うことができるものの、墓域や埋葬小群などを構成している人骨群がまるまる調査されたような、まとまった資料が存在せず、その意味では早期の墓制、ひいては当時の社会構造に関しては不明な部分が多いことになる。

6. おわりに

以上、縄文時代の墓制研究における埋葬属性について概観し、その性格を述べるとともに、開地遺跡における早期人骨の埋葬属性について検討を行ってきた。しかしながら、資料数の少なさもあり、従来の見解以上の考察を加えることはできなかった。現在、國學院大学文学部考古学研究によって、群馬県居家以岩陰遺跡の発掘調査が行われており、良好な事例が検出されると聞く。今後は、その資料を含め、また開地遺跡だけでなく、洞穴・岩陰遺跡の事例を含めた上で、総括的に早期の墓制研究を進めていく必要があるだろう。

最後になったが、國學院大学文学部の谷口康浩教授には国史学会平成30年度2月例会において発表の機会ばかりでなく、本稿を発表する場をも与えていただいた。末尾になったが、ここに記して感謝したい。

註

- (1) 埋葬小群とは墓域内における埋葬人骨の集中地点や墓の群在地点を指し示す語である。その内容には血縁関係者が含まれると想定されており（山田2008）、家族などの埋葬地点と考えられている。

参考文献

- 石川 朗編 1995『東釧路貝塚発掘調査報告書』釧路市教育委員会
 岡本 勇 1953「相模平坂貝塚」『駿台史学』3、pp.58-76
 岡本東三編 1994『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学考古学研究室
 幸田貝塚発掘調査団 1975『幸田貝塚（4）』松戸市教育委員会
 佐賀県教育委員会編 2017『縄文の奇跡－東名遺跡 歴史をぬりかえた縄文のタイムカプセル』雄山閣
 武田宗久 1953「原始社会」『千葉市誌』pp.14-86、千葉市
 橋 昌信 1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館
 千葉県史料研究財団編 2000「飛ノ台貝塚」『千葉県の歴史』第9巻資料編考古1、pp.276-281、千葉県
 永井昌文・前川威洋・橋口達也編 1972『山鹿貝塚』九州大学医学部解剖学教室
 平安学園考古学クラブ編 1956『石山貝塚』平安学園
 向坂鋼二 1962「埋葬」『蜆塚遺跡 総括編』pp.50-66、浜松市教育委員会

(58) 縄文時代早期の人骨出土例における埋葬属性

- 山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』 4、pp.1-39
- 山田康弘 2001 「縄文人の埋葬姿勢（上）（下）」『古代文化』 53-11・12、pp.12-31・pp.17-34
- 山田康弘 2002 『人骨出土例の検討による縄文時代墓制の基礎的研究（課題番号12710215）』平成12・13年度科学研究費補助金〔奨励研究（A）〕成果研究報告書
- 山田康弘 2007 「総論 縄文時代の葬制」小杉康他編『縄文時代の考古学』 9、pp.3-17、雄山閣
- 山田康弘 2008 『人骨出土例にみる縄文の墓制と社会』同成社
- 山田康弘 2013 「縄文時代における部分骨合葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』 178、pp.57-83
- 山田康弘 2014 『老人と子供の考古学』歴史文化ライブラリー380、吉川弘文館
- 山田康弘 2019 『縄文時代の歴史』講談社現代新書